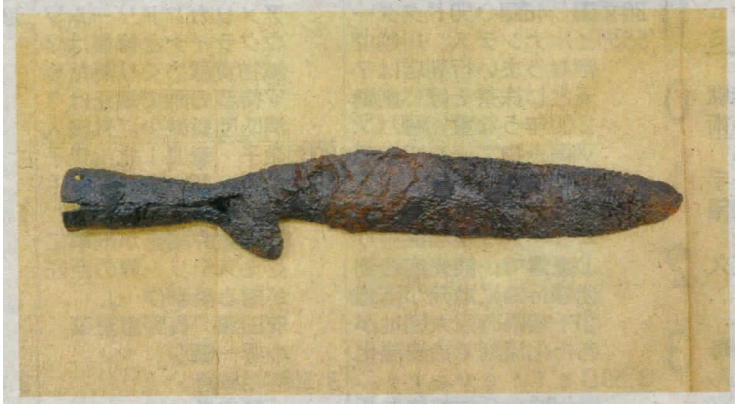
用途不明の鉄製品 本来の形状鮮明に

県内出土例なく、鉾の可能性

原村室内で発掘、保存処理が完了

原村室内の久保地尾根遺跡の竪穴から出土した用途不明の鉄製品が、さび取りなどの保存処理が完了し、本来の形状が鮮明となった。村教育委員会文化財係によると、県内でも出土例はないとみられる。現時点では、形状から鉾（ほこ）のようなものの可能性が高いと考えられるが、今後、県内外の有識者らにも見てもらい、特定作業を進めていく。（町田陽）



保存処理が完了し、本来の形状が鮮明となった鉄製品

鉄製品は、昨年3～4月にかけて村教委が行った同遺跡の発掘調査で出土。同遺跡で鉄製品の発掘は初めて。諏訪地域でも類似したものはなく、珍しい遺物である可能性が高いと注目を集めた。全体がさびで覆われており、本来の形状があいまいだった。

昨年の秋ごろから、同係の松森多恵さんが県立歴史館の指導・協力のもと、さび取りや脱塩、補強などの保存処理を行い、今年2月に完了。形状が鮮明になるとともに、調査や展示にも耐えられる状態となった。処理後の鉄製品は、長さ27・3㌢、幅3・5㌢、厚さ（刃部の一番厚い部分で）0・92㌢、柄の幅2・83㌢、重さは132・3㌘。

保存処理を行ったことで、さびに布目が残っていることが判明し、鉄製品が布に包まれていたとみられることなどが新たに分かった。X線の分析により柄の部分の構造が見えたほか、刃部の断面はひし形のような形状をしており、鉾との類似性が推測できるという。

今後は、古代の遺構、古墳時代の鉄製品などに詳しい県内の有識者らに見てもらうとともに、奈良文化財研究所などにも依頼し、類例や正体、作られた時期などについて特定を進めていく。

同係は「鉄製品は貴重なものになってくるので、維持管理をしっかり行い、将来的には村指定の文化財までもっていくことも考えながら対応をしていきたい」としている。

地域住民らに実際に見てもらおうと、鉄製品をはじめとする出土品数点を4月から村役場1階ロビーに展示する。